

# 生活科を中核としたカリキュラムマネジメントに関する一考察 ～保幼小連携活動：「カレーパーティ」の実践事例を通して～

## A study of Curriculum Management as an Application of Living Environment Studies

—From the curry party Case Study in Preschool-Elementary School Cooperation—

西 出 勉 山 下 由 紀 夫 石 塚 誠 之  
Tsutomu NISHIDE Yukio YAMASITA Masayuki ISHIZUKA

今日、保育園・幼稚園と小学校の連携・接続に関する取組については、幼児・児童の交流活動等は比較的多く行われているが、各学校と保育園・幼稚園が組織として保幼小の接続に重点をおき、計画的に実践されている取組は少ない状況にある。

本稿では江別市内の幼稚園と小学校の連携・接続に関する取組の中から毎年、息長く継続的に活動が展開されている大麻幼稚園・まんまる保育園と大麻西小学校による保幼小交流の実践に着目した。具体的にはカリキュラムマネジメントの視点から継続的・組織的な活動が展開できる要因や条件等について明らかにすることを目的として研究を進めた。その結果、保幼小双方とも交流単元の教育課程への位置付けや園長及び校長のリーダーシップの発揮、外部人材の活用、そして、何よりも教職員間にある連携活動を推進しようというポジティブな組織文化の重要性が明らかになった。

### 1 はじめに

今日、幼稚園等と小学校の連携・接続の問題は、子どもの発達や学びの連続性を保障することをねらいとした幼児・児童の交流活動等は行われているが、各学校と幼稚園等の幼小接続のための取組は、十分実施されているとは言えない状況にある。<sup>(1)</sup>

実践している園長からよく耳にする問題として、次のような事例がある。「幼稚園に比べ小学校の管理職は2～3年で異動となり、校長が変わるたびに幼小連携活動は一からやり直しになる傾向にある。」公立小学校の校長は園長に比べ当該校における勤務年数は短く、管理職同士の共通理解や信頼関係の構築に時間がかかることが課題としてあげられている。

本稿では、江別市内の幼稚園等と小学校の連携・接続に関する取組の中から毎年、継続的に活動が展開されている大麻幼稚園・まんまる保育園と大麻西小学校による保幼小交流の実践（以下、「連携活動」と呼ぶこととする。）について着目した。「なぜ、毎年、活動が継続されているのか?」「継続的・組織的な活動を展開できる要因として考えられるものは何か?」という問題意識のもと、保幼小連携活動について検証していきたい。

具体的には、小学校の生活科を中心とした保幼小連携活動である交流単元「カレーパーティ」の実践を取り上げ、カリキュラムマネジメントの視点から分析し、カリキュラムの連関性や組織マネジメントによる協働性について分析・考察を行うこととする。

## 2 研究の目的

大麻幼稚園・まんまる保育園と大麻西小学校における連携活動の事例（交流単元「カレーパーティ」）を通して、カリキュラムマネジメントの視点から分析・考察を行い、活動が継続的・組織的に展開されている要因や条件等について明らかにすることを目的とする。

## 3 研究の方法

- (1) 大麻幼稚園・まんまる保育園と大麻西小学校の取組を研究対象とし、交流単元「カレーパーティ」の連携活動について研究を進める。
- (2) 当該幼稚園・保育園及び小学校における連携活動について、授業参観や研究協議、管理職等の聞き取り調査などを通して継続的・組織的に展開されている連携活動について、カリキュラムマネジメント・モデルをもとに分析する。
- (3) (2)を踏まえ、連携活動が継続的・組織的に展開されている要因や条件等について分析・考察を行う。

## 4 カリキュラムマネジメント

### (1) カリキュラムマネジメント

カリキュラムマネジメントについては、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（平成20年1月17日）において、次のように述べられている。

#### 【表1】カリキュラムマネジメント

＜教育課程におけるPDCAサイクルの確立＞<sup>(2)</sup>

「各学校においては、このような諸条件を適切に活用して、教育課程や指導方法等を不断に見直すことにより効果的な教育活動を充実させるといったカリキュラム・マネジメント（・がある）を確立することが求められる。」

カリキュラムマネジメントの発想は、学校教育の質の向上を図る観点から、学校や設置者が当該学校の教育活動の成果や課題を把握しつつ、学校改善に向けた具体的な取組を目指そうと

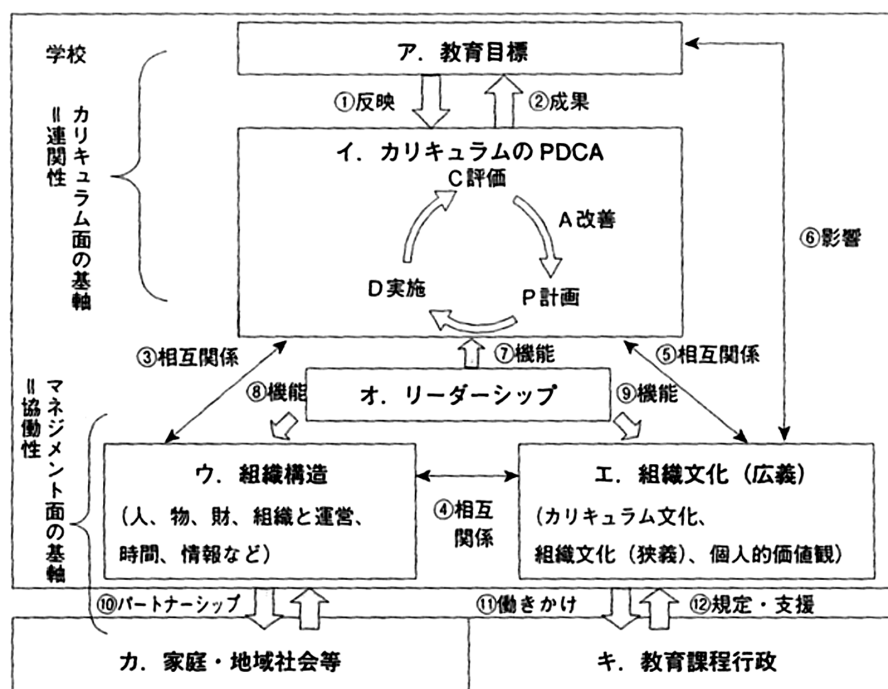
したものである。

我が国で初めて「カリキュラムマネジメント」の用語を使用した中留は、カリキュラムマネジメントについて教育課程経営論を基盤とし、次のような営みとしてとらえている。「学校の裁量権の拡大を前提として、学校の教育目標を実現化するために、教育活動（カリキュラム）を条件整備活動との対応関係を、組織文化を媒介として、PDSサイクルによって組織的・戦略的に動態化させる営み」<sup>(3)</sup>としている。また、田村はカリキュラムマネジメントについて「学校の教育目標を具現化するために、評価から始まるカリキュラムマネジメントサイクルに、組織文化を含めた学校内外の諸条件のマネジメントを対応させ、これを組織的に動態化させる課題解決的な営み」<sup>(4)</sup>であるとしている。吉富は「学校の教育目標を実現するために、学校内外の諸条件を効果的に対応させながら、教育活動の計画・実施・評価・改善にわたり柔軟に循環する過程を通して、教育の質を高めていく組織的な営み」<sup>(5)</sup>であると述べている。

本稿では田村の考え方を基本に、カリキュラムマネジメントを次のように定義する。

**【表2】カリキュラムマネジメントの定義**

<p>&lt;カリキュラムマネジメント&gt;</p> <p>「各学校が、学校の教育目標をよりよく達成するために、組織としてカリキュラムを創り、動かし、変えていく、継続的かつ発展的な、課題解決の営みである。」<sup>(6)</sup></p>
--



【図1】カリキュラムマネジメント・モデル

## (2) カリキュラムマネジメント・モデル

田村はカリキュラムを創り、動かし、変えていく営みであるカリキュラムマネジメントについて、「多様な要素要因が複雑に関連し合って全体を形成している。」と述べており、その全体像や要素間の関連をとらえるために【図1】のような「カリキュラムマネジメント・モデル」<sup>7)</sup>を提示している。

本モデルは、カリキュラム面(目標・内容系列)の基軸である「連関性」とマネジメント面(条件整備活動系列)の基軸である「協働性」から構成されている。そして、「ア. 教育目標」「イ. カリキュラムのPDCA」「ウ. 組織構造」「エ. 組織文化」「オ. リーダーシップ」「カ. 家庭・地域社会等」「キ. 教育課程行政」の7つの要素を分析の視点としてあげている。

本稿では、この「カリキュラムマネジメント・モデル」を参考にしながら、連携活動における交流単元について分析・考察を試みる。

## 3 生活科を中核とした連携活動 ～ 保幼小交流単元「カレーパーティー」

### (1) 生活科を中核とした活動計画(保育・指導計画)

本稿における連携活動は、幼児教育から小学校への円滑な接続を視野に入れながら、主に小学校における生活科を中核とした教育活動と幼稚園における遊びを中心とした保育活動が連動し連携活動として展開されている。

連携活動の一つである保幼小交流「カレーパーティー」は、大麻幼稚園・まんまる保育園と大麻西小学校の「幼小交流計画」に位置付けられており、保育計画と大麻西小学校の生活科年間指導計画に明示されている単元である。本事例は、もともと小学校の体育館の横にある畑に幼稚園の園児と小学校1・2年生の児童がじゃがいもを植えて収穫する活動がはじまりである。平成16年度からは収穫をみんなで喜ぶ「カレーパーティー」を実施することになり、交流単元「カレーパーティー」がスタートした。現在も毎年、「幼小交流計画」に基づき、幼児と児童の交流活動が行われている。

交流単元「カレーパーティー」は、じゃがいもの植え付け(5月)からはじまり、収穫体験(8月)、幼小で収穫したジャガイモを料理して「カレーパーティ」まで、年間を通した栽培活動として取り組まれている。

大麻幼稚園・まんまる保育園では、月別の保育計画に食育の観点から絵本等の読み聞かせやじゃがいもの生育の様子を観察し収穫体験へ、そして、「カレーパーティ」を通して食べる喜びへとつなげ、幼児の満足感や成就感を育てることを大切にしている。また、大麻西小学校では、生活科の年間指導計画(5月～9月)にじゃがいもの栽培活動が計画されており、特にじゃがいもの収穫と「カレーパーティ」は独自の交流単元「ようちえんの子とこうりゅうしよう！」(10時間扱い)として位置付けられている。本稿ではこの年間を通した一連の栽培活動からカレーパーティーまでの活動を、保幼小交流単元「カレーパーティー」として位置付け考

えることにする。

本事例の交流単元では、小学校生活科の学習活動を基盤としながら、幼稚園の保育時間に柔軟に対応する形で実践が積み重ねられている。植物の栽培活動を通して幼稚園の「保育プロセス」と小学校生活科の「学習プロセス」がそれぞれの保育・指導計画に基づき展開されているのである。本稿では保幼小交流単元「カレーパーティー」について、田村の「カリキュラムマネジメント・モデル」を基本にいくつかの視点から分析・考察する。

#### 4 交流単元の目標 ～「教育目標」からのアプローチ

カリキュラムマネジメントの目的は、「教育目標の具現化」であり、具体的には目標を実現するために「目指す子ども像」や子どもたちにどのような力を身に付けさせるのか？「子どもに育成したい力」を明確にしていくことが重要である。

##### (1) 独自の目標設定

交流単元「カレーパーティー」は保育計画（月案）と生活科年間指導計画に位置付けられており、具体的なねらいと目標が示されている。

【表3】幼稚園・保育園の「ねらい」と小学校の「目標」（一部抜粋）

幼稚園のねらい	小学校の目標（生活科）
<p>【5月の保育計画】（年長児）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・園生活の仕方がわかり、保育者や友達との遊びに満足感が持てるようにする。</li> <li>・戸外に出て自然と触れ合ったり、体を動かして遊ぶ。</li> <li>・自分たちで始めた遊びを保育者も楽しみ、子どもの考えや発想を取り入れていく。</li> </ul> <p>&lt;幼小交流（じゃがいも栽培）&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◇ 食育に関心が持てるように、絵本等を通して紹介していく。</li> <li>◇ 実際にじゃがいもを植えて見て、育てることに期待する。</li> </ul> <p>【9月の保育計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・秋の自然に触れながら、友達と一緒にいろいろな活動に取り組む。</li> </ul> <p>&lt;幼小交流（じゃがいも栽培）&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◇ 観察を行い、「カレーパーティー」を通して、収穫し食べる喜びにつなげていく。</li> </ul>	<p>【5月の単元指導計画】（生活科：2年生）</p> <p>単元「やさいをそだてよう」</p> <p>じゃがいも植え【幼小交流】</p> <p>&lt;単元の目標&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・じゃがいもを育てることを通して、じゃがいもの変化や成長の様子に気付き、じゃがいものへの親しみをもち、大切に育てることができるようにする。</li> </ul> <p>&lt;幼小交流（じゃがいも栽培）&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◇ じゃがいも植えを通して、じゃがいもの成長への期待をふくらませたり、世話をしようとする気持ちを高めるようにする。</li> </ul> <p>【9月の単元指導計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・収穫したじゃがいもで「カレーパーティーを行う」というめあてを持ち、カレーづくり係と遊び係の役割分担の中で、計画を立てたり準備をしながら、収穫したじゃがいもをみんなで味わおうとする。</li> </ul>

このように保育園・幼稚園サイドと小学校サイドのそれぞれがねらいや目標を設定しており、交流単元「カレーパーティー」の活動が共有されている。

## (2) 「連携・接続」を意識した目標設定

連携活動については、学校種の「連携・接続」という視点から考えることが必要であり、幼児・児童に「どのような力を身に付けさせるのか？（育成したい力）」を明確にし、連携活動ならではの共通の目標を設定することが重要である。それでは、どのような目標が考えられるのであろうか。そのためには、保幼小連携の目的を今一度、考えていく必要がある。

酒井は保幼小連携の目的について、次のように述べている。<sup>(8)</sup>

### 【表4】保幼小連携の目的

保幼小連携とは保育所・幼稚園と小学校との連携により、その間のなめらかな接続を達成することで、幼児教育と小学校教育双方の質の向上を図ることだといえる。  
言い換えれば、これが保幼小連携の目的である。

さらに、そのための具体的な目標として、次の4点をあげている。

### 【表5】保幼小連携の具体的な目標

- ① なめらかな移行
  - ・ 発達の連続性を踏まえて、保育所・幼稚園から小学校への移行を、なめらかに達成させる。
- ② 発達の非連続的変化に対する個別の対応
  - ・ 同時に個々の子どもの非連続的な変化に応じ、個別的な対応が図れるように配慮する。
- ③ 連続的な保育と指導の実現
  - ・ 学びの非連続性を解消し、より連続的な保育と指導を行う。
- ④ 学びのつなげ方のフィロソフィーの構築
  - ・ 校種間の独自性と一貫性・連続性の双方を踏まえて学びのつなげ方を検討し、大局的な観点から学びのつなげ方のフィロソフィーを構築する。

本連携活動の目的も「なめらかな接続を達成する」ことにあり、交流単元「カレーパーティー」の活動内容・方法を鑑みる時、具体的な目標の要素として①及び③を重視していきたい。

また、生活科の目標の特質について、木村は次のように述べている。<sup>(9)</sup>

### 【表6】生活科の目標

生活科の究極の目標は「自立への基礎を養う」という抽象的な内容である。人間が独り立ちするための基礎的部分を育てるという子ども像と育てたい方向性が示されている。

これは明らかに「方向目標」である。(中略)生活科の場合、個々の単元や個々の児童に対しては、具体的な「到達目標(行動目標)」を設定することは可能であるし、全く問題はない。すなわち、生活科の教育目標は「到達目標(行動目標)を内に含んだ方向目標」なのである。

交流単元「カレーパーティー」は、生活科を中核としたカリキュラム設計を基本としていることから、連携活動の目標は「到達目標(行動目標)を内に含んだ方向目標」として具体的に考えていく必要がある。

この点について、園長及び校長からの聞き取り調査では、目標と育成したい力との関係について、次のようなことが述べられている。

**【表7】身に付けさせたい力(育成したい力)**

<質問項目>

「連携活動を通して、子どもたちにどのような力を身に付けさせたい(身に付く)とお考えですか？」

**【園長】**

- 小学生の姿を見て、憧れ、尊敬の念を持つことができますと思います。
- とともに活動することにより、道徳性や規範意識、思考力等を育てたいと願っています。
- 様々な人間関係を通して、豊かな感性が育ってほしい。

**【校長】**

- 異年齢集団の活動となるので、幼稚園児は小学生に対する憧れ、小学生は幼稚園児に対するいたわりの心など、豊かな心が育つと思います。
- 小学校では自分の力でやりとげようとする意欲、集団で協力する力などが育つと考えます。
- 幼稚園児にとっては、小学校での活動を通して、将来の自分が学ぶ場での体験ができ、進学前に自信を持つことにつながると思います。

「身に付けさせたい力」については、連携活動における幼児や児童の姿や園長及び校長の思いや願いを含めて【表7】のような意見がでてきたものと考えられる。意見の中からは「憧れ」「豊かな心、感性」「ともに活動する」「異年齢集団の活動」など、いくつかの共通のキーワードを読み取ることができる。また、校長は「小学校では自分の力でやりとげようとする意欲、集団で協力する力などが育つ。」など、「自立心」や「協同性」に着目していることが伺える。

保幼小連携の目的を第一義に踏まえ、本連携活動を【表5】の①及び③の視点から考えた場

合、幼稚園教育要領「人間関係」の領域との関連から、次のように考える。連携活動ならではの幼児と児童との交流活動を通して、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う。」こと、「憧れ」や「自立心」「協同性」が育まれる保育と指導が展開されることが重要であると考え。さらに、カリキュラムマネジメントの視点から、連携活動の目標と内容・方法のつながり、連関性を踏まえた場合においても、共有できる目標として「自立心」と「協同性」は重要な観点であると考え。

### （3）共通目標の設定

本連携活動における「教育目標」と「カリキュラム（PDCA）」は、カリキュラムマネジメント・モデルの中でも重要な要素である。交流單元「カレーパーティー」のねらいや目標については、幼稚園・保育園と小学校「生活科」に保育・指導計画にそれぞれ位置付けられているが、連携活動としての共通目標は設定されていない。目標とカリキュラムの内容・方法について考える時、カリキュラム面の基軸である「連関性」に着目していくことが重要である。本事例ではじゃがいもの栽培活動が共通の内容とされているが、特に保幼小交流活動において大切にしたい共有できる目標設定が課題である。

先述の通り、「身に付けさせたい力」（育成したい力）として「自立心」や「協同性」を共有すべき観点とした場合、次のような目標（例）を考えることができる。

【表8】連携活動における共通目標（例）

「ジャガイモの栽培活動やカレーパーティーを通して、」

- ・友だちや1年生（幼稚園児）と一緒に活動する喜びや楽しさを味わうとともに、自分でできることは最後までやり遂げながら、満足感や達成感をもつことができる。
- ・学級全体で共通の目標をもって話し合ったり、友だちと役割を分担して自分なりに工夫したり協力しながら、活動することができる。

## 5 交流単元のPDCA～「カリキュラムのPDCA」からのアプローチ

### （1）連携活動のプロセス

交流單元「カレーパーティー」については、保育園・幼稚園の保育計画と小学校生活科の指導計画にそれぞれ位置付けられている。特にじゃがいもの収穫と「カレーパーティー」は独自の交流單元「じゃがいもをしゅうかくしよう！」（2時間扱い）と「ようちえんの子とこうりゅうしよう！」（10時間扱い）として位置付いている。

保育園・幼稚園の保育は、一般的に次のようなプロセスで進められる。



【表9】保育のプロセス<sup>(10)</sup>

<p>&lt;保育のプロセス&gt;</p> <p>① 幼児の姿から、ねらいと内容を設定する。</p> <p>② ねらいと内容に基づいて環境を構成する。</p> <p>③ 幼児が環境にかかわって活動を展開する。</p> <p>④ 活動を通して幼児が発達に必要な経験を得ていくような適切な援助を行う。</p>
---

交流単位では保育園・幼稚園による①～④の保育プロセスを基本とした「経験カリキュラム」と小学校における生活科を中心とした「教科カリキュラム」が、共通のじゃがいもの栽培活動を通してそれぞれ展開されている。このように保幼小の活動はカリキュラムの本質的な違いはあるものの、活動レベルでは共有しながら取り組まれているところに特色がある。

本稿では連携活動における共通目標と活動内容・方法のつながりを意識し、活動の流れを仮説的に【表10】のように考えていく。

【表10】連携活動のプロセス

<p>&lt;連携活動のプロセス&gt;</p> <p>A 「であう」 → 幼児や児童が環境や対象とはじめて「であう」場面</p> <p>B 「かかわる」 → 幼児や児童が体験活動を通して事物・事象や人など、様々な環境にかかわる場面</p> <p>C 「ふりかえる」 → 幼児や児童が経験したことを表現しながら、ふりかえる場面</p>
---

また、このプロセスを基本に、交流単位「カレーパーティー」の活動の流れを整理すると【表11】のように考えることができる。

【表11】交流単位「カレーパーティー」の流れ

A であう	<p>1 「じゃがいもを育てよう！」</p> <p>◇ じゃがいもを植える。(5月)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年長児及び小学校1・2年生合同のじゃがいも植えを行う</li> <li>・じゃがいも植えの様子を観察カードに記録する</li> </ul>
B かかわる	<p>2 「じゃがいもの世話をしよう！」</p> <p>◇ じゃがいもの世話をする。(6月～8月)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・草とりや水やりなどを行う</li> <li>・観察カードに記録する</li> </ul> <p>3 「じゃがいもを収穫しよう！」【独自の単元】</p> <p>◇ じゃがいもを収穫する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年長児及び小学校1・2年生合同でじゃがいもを収穫する</li> <li>・じゃがいもの収穫の様子を観察カードに記録する</li> </ul>

C ふ り か え る	<p>4 「ようちえんの子と こうりゅうしよう！」(カレーパーティーをしよう!)【独自の単元】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◇「カレーパーティー」の計画を立てる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・めあて(目標)を決める</li> <li>・グループづくりを行う</li> </ul> </li> <li>◇「カレーパーティー」の準備をする。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「遊び(ゲーム係)グループ」～ 企画・立案, 役割分担など</li> <li>・「カレーづくりグループ」～ 親子でカレーづくり(保護者の協力)</li> </ul> </li> <li>◇「カレーパーティー」を行い, 交流する。(年長児及び小学校2年生) <ul style="list-style-type: none"> <li>・体育館で年長児及び「遊びグループ」の2年生がゲームを行う</li> <li>・2年生が司会進行をしながら年長児と2年生がお互い歌を歌う</li> <li>・「カレーづくりグループ」が料理したカレーを, 全員で食べ交流する。</li> </ul> </li> </ul>
----------------------------	--

幼稚園・保育園のねらいと小学校「生活科」の目標の具現化のためには、双方が「何のため、どのようなことを行うのか。」という「そもそも論」にもどりながら、これまでの活動内容・方法をふり返り、小さな工夫・改善を繰り返していくことが重要である。このように連携活動の改善・充実を繰り返しながら、質の向上を図っていくところにカリキュラムマネジメントの本質がある。

これまで連携活動が継続的に展開されてきた第1の要因として「ねらいと目標」の設定や「幼小交流計画」の共有を考慮することができる。特に小学校では生活科を中核とした教科書単元を基本に、その時々状況を踏まえ独自の単元開発に取り組んでおり、活動当初から教職員の中にカリキュラムマネジメントの発想が脈々と息づいていたことが伺える。単元開発という改善志向が学校の外部からではなく、学校内部からボトムアップにエンパワーメントが表出されているところに「継続性」や「活動の連続性」を生み出す源泉があるものとする。

## (2) 連携活動と「縦割り保育」

交流単元「カレーパーティー」の活動は、対象が小学校2年生と年長児である。幼稚園等の交流単元では、年長児の連携活動を通して、年少児、年中児の保育にもつなげようという発想から保育計画が立案されている。具体的には「食育」をテーマに、活動当日に年少児・年中児も昼食にカレーを食べて、お兄さん、お姉さんである年長児と同じ経験をしながら、自分も将来、カレーパーティーに参加する期待感を育てるようにしている。また、昼食の前には年少児・年中児合同による食育に関する劇の鑑賞会が行われる。劇は教職員による台本づくりや、衣装づくり等を通して、子どもたちの前で協力し合いながら行われている。

本事例では連携活動を通して縦割り保育という保育形態を生かした活動の連続性を意識しているところに特色がある。連携・協力と言えは異校種間による接続を考慮することは当然であるが、保育園・幼稚園サイドとして活動の流れを年少・中・長児の喜びや楽しみ、期待感に結び付け保育が意図的・計画的に実践されている。さらに、「食育」については、保育計画に位置付けられており、小学校へのなめらかな接続という視点からも、カリキュラムの関連性や学びの連続性へ発展していくことが考えられる。交流単元「カレーパーティー」の実践は、単に年

長児と小学校2年生の活動のみならず、年少・中児の保育の質の向上に寄与しており、保幼小連携ならではの実効性のある教育活動として捉えることができる。連携しながら自園の保育を見つめ直し、保育の質の向上を図る活動はカリキュラムマネジメントの視点からも重要であり、連携活動の継続性を導き出す要因として考えることができる。

## 6 交流単元と人・物～「組織構造」「家庭・地域社会等」からのアプローチ

これまでも述べてきたように交流単元「カレーパーティー」は保育園・幼稚園と小学校が連携・協力しながら活動を展開しており、その背景には人、もの、お金、情報など実際に動かしていくための組織構造がある。教育活動をスムーズに運営していくための経営活動や組織マネジメントの視点から、本単元における栽培活動やカレーづくりを支える人やもの等について考えていきたい。

### (1) 「栽培活動」や「カレーづくり」を支える人・もの

じゃがいもの栽培活動については、年間を通して意図的・計画的な活動を展開していく必要があり、その際には園や小学校の教職員以外の人材が活用されている。外部人材としては毎年、春先の雪解けの状況をみながら、学校近郊に住んでいる住民に畑おこしをお願いしている。また、肥料をまく、うねきり、草取り等の作業についても保育園・幼稚園のバスの運転手さんや教職員がその時期の状況に応じて適宜、取り組んでいる。

2年生のカレーづくりについては、毎年、学年の保護者の理解と協力を得ながら行われている。カレーづくりの材料の準備、当日は子どもたちとともに野菜を切る、炒める、カレーを煮込む等の活動に取り組んでいる。参加している保護者は、次のように述べている。

#### 【表12】保護者の話から

- ・子どもたちは、カレーづくりがとても楽しく、喜んでいるように見える。
- ・保護者はカレーづくりを通して、自分の子どもの様子を見ることができるのでよいと思う。特に、我が子が友だちとどうかかわっているのか、ふだん見ることのできない姿を見ることができる。
- ・この活動は低学年の時期に行われていることがよいと思う。低学年のうちは、無邪気にはりきって、ノリノリの雰囲気の中で行うことができる。

子どもにとっても活躍の場が与えられ、保護者にとっては我が子の姿を改めて見直すよい機会となっている。さらに、参加した保護者は低学年という発達段階に目を向けながら教育活動の内容や子どもの様子を受け止めているのである。保護者や地域住民が学校の状況を様々な視点から見取っている事例であり、学校の教育活動が外部の目から評価されている場面であると

言える。改めて学校と保護者との関係，家庭・地域社会との連携の重要性を認識されるとともに，活動の継続性を担保する重要な要素であると考えられる。

## （２）連携活動を支えるミドルリーダーの存在～運営面から

これまでは活動を直接的に支える人材について述べてきたが，運営面で間接的にサポートする人材を見逃してはならない。具体的には保育園・幼稚園における連携担当の教員と小学校の教務担当の教員の存在である。先述の通り，保幼小の連携活動については，年間の活動を見直しをもって実践するために「幼小交流計画」が作成され共有されている。交流計画が実効性のある教育活動として実践されるためには事前の情報共有が重要であり，保育園・幼稚園と小学校の双方の連携担当の教員がきめ細かな連絡・調整を行っている。じゃがいもの発注やいも植え，収穫の時期の調整，保護者への協力依頼，当該学級・学年との打合せ等，目には見えないミドルリーダーとしてのマネジメントが展開されている。ミドルリーダーはマネジメントの基軸である協働性を支える人材であり，連携・協力の成否は，人と人とをつなぐミドルリーダーのマネジメント力に左右されるとも言えるのではないだろうか。

## 7 交流単位と園長・校長の連携・協働

### ～「組織文化」「リーダーシップ」からのアプローチ

#### （１）ボトム・アップの連携活動～ポジティブな組織文化

本連携活動の歴史は，小学校の体育館の横にある畑に幼稚園の園児と小学校1・2年生の児童がじゃがいもを植えて収穫する活動からはじまり，平成16年からは収穫をみんなで喜ぶ大麻西小学校独自の交流単位「カレーパーティー」が継続して実践されてきた経緯がある。一般的に校種が異なる連携・接続の取組は，教育委員会等の支援を受けながらトップ・ダウンに組織体制を構築し，具体的な活動が計画・実践されることが多い傾向にある。しかし，本事例のスタート期は幼稚園・保育園と小学校が自然な交流の中で取組が積み重ねられてきており，いわゆるボトム・アップの形式で連携活動が行われているところに特色がある。双方の教職員の信頼関係を背景として「まず，やってみよう！」という機運からスタートし，どちらかと言えば活動の目的よりも内容・方法が優先される中で実践が積み重ねられてきた面がある。

田村は「組織文化」について，次のように述べている。<sup>(11)</sup>

#### 【表13】組織文化の2つの側面

「組織文化」は二つの側面からなる。一つはカリキュラム文化（子ども観，学力観，指導観など，教育活動に直結した文化）であり，これが教育の方向性を決める。（中略）

もう一つは，教職員同士の人間関係のあり方や働き方など，経営活動に直結した部分で，これが狭義の組織文化である。

本事例の活動は、「まず、やってみよう！」という機運をもとにボトム・アップによる活動が毎年、繰り返して行われてきている。このようなことから、保幼小の教職員には連携活動に対して前向きな姿勢で自分事として積極的に取り組もうとする姿を想像することができ、かつ園・学校全体にポジティブな組織文化が根付いていると考えられる。教育活動と経営活動に直結したポジティブな組織文化こそが連携活動の継続性を間接的に支える原動力であり、目には見えない要因として考えていくことが重要である。

## (2) 園長・校長のリーダーシップの発揮

交流単元「カレーパーティー」が今現在、継続されている要因として、園長と校長のリーダーシップの発揮を忘れてはならない。ポジティブな組織文化の生成には、トップリーダーの指導性に着目する必要がある。

連携活動の推進に当たり、園長及び校長はその役割について、次のように述べている。

### 【表14】園長及び校長の役割

#### 【園長】

- 教職員が自らリードして実践できるように、園長はアドバイザーになることが大切である。特に教員間の話し合いを大切にしながら、これまでの連携のポイント（つながり）を伝えていくことを心がけている。
- 保護者や地域住民に対して理解と協力を得るために、様々な機会を通して「伝える」ことを意識している。
- 小学校側には協力していただきながら連携活動が続いているので、今後もお互いが歩み寄りながら進んでいきたい。

#### 【校長】

- リーダーが理念をしっかりと示し、教職員に連携活動のねらいや実施のあり方について、具体的に伝えていくことが大切である。
- 幼稚園としっかりと情報交換し、連携の利点をそのつど確認していくことが必要である。
- 学校の責任者として、保護者に成果を確実に伝えていくことが大切である。保護者への情報提供は、学校だよりや毎週の校長通信に加え、平成27年度から幼小連携便り「そよかぜ通信」を発行している。
- 平成27年度には保育園・幼稚園と小学校双方のPTAの参画を得て、「大麻西地区連携協議会」を立ち上げ、活動状況を報告している。

園長及び校長の役割として共通のキーワードは、「伝えること」をあげることができる。自園・自校の教職員に「伝える」、保護者や地域住民に「伝える」など、共通理解を図るべく理

念（ビジョン）やねらい、活動の内容・方法等について、情報を発信している。日々の教職員との対話や議論、保護者等に対する通信、お便りの発行、方法は様々であるがリーダーとして情報を発信しながら連携活動に対する理解と納得、そして、連携・協力を引き出すことを考えている。特に「大麻西地区連携協議会」を立ち上げについては、組織体制の確立という視点から、カリキュラムマネジメント・モデルの「組織構造」と「家庭・地域社会等」のパートナーシップの構築に大きな影響を与えていると考えられる。このようにモデルの各要素であるリーダーシップや組織構造、家庭・地域社会等等、組織文化は、その要素間の相互作用によりマネジメント面の基軸である「協働性」をより強固なものとしながら、連携活動の継続性を保障するものとなっているものとする。園長や校長はその時々々の状況を踏まえ、園や学校にポジティブな文化を醸成する文化的リーダーシップを発揮しながら、連携活動を支える組織文化を構築しているものとする。

## 8 まとめ～今後へ向けた課題

本稿では連携活動として取り組まれている交流单元「カレーパーティー」の実践について、カリキュラムマネジメント・モデルをもとに、交流单元が継続的・組織的に展開されている要因や条件等について明らかにすることを試みてきた。

具体的には交流单元が保育・教育課程に位置付けられていること、目標やねらいが明確になっていること、教職員や保護者等の理解と協力を得るために、園長・校長によるリーダーシップが発揮されていること、ポジティブな組織文化が根付いていること等、実践が継続されている要因や条件等について述べてきた。

それでは今後へ向けた課題として、どのようなことをあげることができるだろうか。

一つ目は、連携活動ならではの「共通目標の設定」である。保育園・幼稚園と小学校それぞれに交流单元の目標は設定されているが、連携・接続を意図した目標設定にまでには至っていない状況である。カリキュラムの関連性や校種間の接続の視点から、目的や目標を考えていくことが必要であり、「なめらかな移行」や「学びの連続性」を意識した教育活動を展開していくために共通目標の設定は重要である。先述の通り、「自立心」や「協同性」は保育園・幼稚園から小学校へかけて連続性をもって育成したい力として価値があるものとする。

二つ目は、活動案の共有化（様式等の共有化）である。連携活動の際に、校種間の担当者が同じ資料で打合せできるようにする等、担当者間が子どもの活動をイメージしながらカリキュラムの工夫・改善を図っていくことが重要である。そのためには連携活動の可視化を意識し、様式等を共通にした活動計画シートの開発も考えていくことが大切である。また、シートの内容として特別な教育的ニーズのある児童への対応等、児童についての相互理解をどのように進めるのか検討する必要がある。

三つ目は、組織力の向上である。連携活動については、保育園・幼稚園と小学校という学校

組織が相互に連携・接続に向けて協働した取組が求められる。本事例の活動は、幼稚園・保育園と小学校が自然な交流の中で取組が積み重ねられてきている。「まず、やってみよう！」という機運からスタートし、双方の教職員の信頼関係を背景とした「人とのつながり」が基本である。しかし、その「つながり」は、どちらかと言えば活動の目的・目標の達成のための関係づくりというよりは、内容・方法が優先される中で双方の職場における人間関係の維持に力点がおかれているのではないだろうか。保育園・幼稚園にしろ小学校にしろ、教育目標を達成するための組織であると考えた場合、集団維持機能を踏まえつつ目標達成機能に着目し、活動の成果検証を行っていく中で組織力の向上を図っていくことが重要である。終わりに、本稿で組織力の向上という視点から十分論述することができなかった連携活動の推進や交流単元の開発等については、今後の課題として考えていきたい。

## 謝辞

本研究を進めるに当たり、深いご理解とご協力のもと数多くの資料等を提供いただきました大麻幼稚園・まんまる保育園の飯沼園長先生をはじめ教職員の皆様には心から感謝申し上げます。

また、授業参観や研修会を場を設定いただきました江別市立大麻西小学校の中井校長先生をはじめ教職員や保護者の皆様方には、この場を借りて深くお礼申し上げます。

## <引用文献>

- (1) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（平成22年11月11日）
- (2) 中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（平成20年1月17日）
- (3) 吉富芳正「学力を創るカリキュラム経営『授業改善につなげるカリキュラム・マネジメント』」ぎょうせい P71 2011年
- (4) 同前 P71
- (5) 同前 P72
- (6) 田村知子「実践・カリキュラムマネジメント」ぎょうせい P2 2011年
- (7) 同前 P7
- (8) 酒井朗・横井紘子「保幼小連携の原理と実践～移行期子どもへの支援」 ミネルバ書房 P72～P73 2011年
- (9) 木村吉彦『『スタートカリキュラム』のすべて』 ぎょうせい P8 2010年

- (10) 文部科学省「幼稚園教育指導資料第3集『幼児理解と評価』」平成22年7月改訂  
ぎょうせい P9 2010年
- (11) 田村知子「実践・カリキュラムマネジメント」 ぎょうせい P9 2011年

### <参考文献>

- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター「幼児期から児童期への教育」ひかりのくに 平成17年
- ・無藤 隆「幼児教育の原則 ～ 保育内容を徹底的に考える」ミネルバ書房 2009年
- ・大野裕己「学年・学校種間接続の意義と役割」教育展望2015.7・8 合併号 教育調査研究所
- ・文部科学省「幼稚園教育要領解説」平成20年10月 フレーベル館
- ・木村吉彦「スタートカリキュラムの意義について」初等教育資料2014年12月号 東洋館出版社
- ・天笠茂「カリキュラムを基盤とする学校経営」ぎょうせい 2013年
- ・浜田博文「学校を変える新しい力」小学館 2012年
- ・北神正行「『つながり』で創る学校経営」 ぎょうせい P2011年